

光学系設計技術部会 講演要旨

開催日：2020年12月14日（月） <2020-2 ②>

テーマ：「Technology, Technique & Rapport（技術、そして芸術的技巧と信頼性）」

講演者：ND CHOW 氏（写真家）

本プレゼンテーションでは、一般消費者を意識したカメラ技術の改善が、プロの写真家のニーズには合っていないということについて説明させていただいた。具体的には、オートフォーカスカメラとミラーレスカメラの変化に関する相対的なメリットとデメリットについて説明した。

【技術・技巧・親近感】

「どのカメラが一番良く撮れますか」とよく聞かれます。答えは単純ですが、簡単ではありません。「ラファエロのように描くには4年かかったが、子どものように描くのには一生涯かかった」というピカソの名言があります。それは形式が重要ではないということではなく、むしろ、技巧を完全に極めることが芸術に關係する技術よりも優先されるべきであるという意味でしょう。プロの写真家である私にとって、これは、使用しているカメラの技術的限界を理解した上で、被写体、自分、そして写真を見る人の間に親近感が生まれるような写真を生み出すことを意味します。

ニエプスが19世紀に世界初の写真を作成してから多くの変化がありました。写真がシャッター、フィルム感度、絞り、レンズ等の基本技術によって制約されていることは変わりません。スタイケンやウェストンのような芸術家の初期の美術写真を見ると、現代の技術を使用しても、その先駆的な作品を「改善」することは困難でしょう。カラー写真とインスタント/デジタル写真の登場を除けば、写真の本質はさほど大きく変わっていません。それにもかかわらず、写真技術は絶えず変化しています。

戦後の消費者文化の到来と、コダックブローニーなどの使いやすいカメラの登場により、カメラ技術は消費者の需要を促す方向へと大きくシフトしていきました。そのために、カメラ会社は細かな改善を次から次へと加え続け、消費者は写真の技術を習得する必要がますますなくなってきました。しかし、これはより良い写真を生み出すことにつながるのでしょうか？ロジャー・スクルトンのような「芸術としての写真」の批評家は、一つの技術としてのカメラは、最もベーシックなモデルのものでさえ、他の芸術形式とは異なるかたちで、鑑賞者、芸術家、対象物の間にある程度の分離を生み出すと指摘しています。カメラ技術が進歩するにつれて、かつては写真家に求められた技術がどんどんカメラに取って代わられるようになり、被写体と写真を見る人の間にさらに多くの分離が生まれます。最終的に、日々洗練されていくカメラ技術によって被写体は写真家と視聴者から遠ざけられ、プロの写真家が技巧を通じて伝えることができる真の親近感は失われることになるでしょう。

技術の進歩に伴う問題は、カメラそのものは被写体を「認識」できないことに起因します。つまり、カメラ自体はカメラマンが見ているものを実際には見ていません。たとえば、デジタル一眼レフカメラのオートフォーカス機能の発展について考えてみましょう。最初にヒットしたデジタル一眼カメラであるキャノン社のKissには、オートフォーカス（AF）のフォーカスポイントは7つしかありませんでした。これに比べ、ソニーの最新モデルα9には、425のフォーカスポイントがあり、非常に速いスピードでのオートフォーカスが可能になっています。このようなカメラで撮影された画像は、普通に良いものにみえますが、トリミングまたは拡大すると問題が見え始めます。低被写界深度のポートレートでは、被写体の目が写真を見る人の注意を引くことが多いですが、オートフォーカスを使うと、被写体の顔や体の他の部分に焦点が合ってしまうことがよくあります。この問題をさらに複雑にするのは、オートフォーカスメカニズムの速度を上げるには、ギアをかなり緩くする必要があり、その結果、ギアが固めに造られている古いレンズに比べて正確な手動フォーカスが難しくなることです。最近のミラーレスカメラの普及にも同様の問題があります。ミラーレス技術は、消費者にとって写真撮影をよりシンプルにする一方で、プロの写真家を被写体からさらに分離してしまいます。すなわち、CCDとLEDスクリーンを介して少なくとも2度の分離が追加され、写真家が被写体を「本当に見る」のが難しくなります。技術にはメリットがありますが、それが社会に付加する幅広い価値の観点から検討する必要があります。技術によってより多くの人が写真に親しむようになるとしても、それによって被写体、写真家、写真を見る人の間の社会的関係が阻害されたり、劣化させられたりすることがあってはなりません。